

目的 わが国の医療保険は複数の制度が並列しており，制度間で被保険者である患者が受ける給付には格差がある。また，組合健康保険制度の場合，同一制度内であっても附加給付の支給基準によって組合間で給付の格差が生じている。このため，患者を擁する家計の負担にも格差が存在している。負担格差の実態を分析し，その結果から，家計にとって今日の各医療保険制度がもつ意味について考察することを目的とする。

方法 各制度における給付の実態を分析し，欧米諸国の医療保険制度との比較検討をすることによって，家計負担の類型化を行なう。また，モデルケースを組み立て，各制度間あるいは組合間の負担格差の度合を算出する。これらのことから，各制度が家計に対してもつ意味について検討した。資料としては，各制度の「事業状況報告書」，健康保険組合連合会「附加給付便覧」，厚生省「社会医療診療行為別調査報告」，「患者調査」などを用いた。

結果 わが国の医療保険は，制度によって被保険者の家計に及ぼす経済的影響が異なるその実態が明らかになった。医療保険の今後のあるべき姿を考え直す必要があると思われる。